

蒲生慶一先生を偲んで

佐々木 あや乃
SASAKI Ayano

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

Quadrante, No.24 (2022), pp.27–28.

蒲生先生と私は神奈川県立湘南高校の同窓で、蒲生先生が私の一学年下でいらっしゃる事が教授会で判明していたので、私は先生のご着任を密かに心待ちにしていた。とはいえ、専門も地域も全く重ならない私たちなので、蒲生先生が赴任されて間もないある日の夕方、私は先生を西武多摩川線の中で偶然お見かけした際に、ここぞとばかりに自己紹介をした。が、それ以来、軽々に同窓であることなど告白しなければよかったと思うほど、学内外ですれ違う度に遠くから深々とお辞儀をされてしまうようになった。どなたに対しても常に謙虚に接していらしたお姿が、今更ながら思い出される。

その後間もなく、蒲生先生が中心となって活動していた点検・評価委員会の仕事を、私もお手伝いすることとなった。アンケートの配布や回収にあたってくれた蒲生ゼミの学生たちと過ごす中、先生の熱心なご指導ぶりを聞くにつけ、また点検・評価の献身的なお仕事ぶりを間近で拝見するにつけ、その真摯なお姿には正直圧倒されるばかりだった。また、2学部発足直後には、基礎演習WGでご一緒する機会もあったが、受講学生のために奔走される先生のお姿にもただただ敬服し通しだった。しかも、出身地を離れて中央線沿線に居を構えていた私とは異なり、先生は2時間ほどかけて茅ヶ崎からはるばる通勤されていた。遅い時間帯の多摩川線で先生のお姿をお見かけすることも多々あり、「湘南新宿ラインの最終に間に合う

のかしら」などと勝手に何度も案じたほど、遅くまで熱心にお仕事をされていた。

蒲生先生との距離が別次元で近づいたのは、湘南高校に縁のあった、本学の体育の教授でいらした阿保雅行先生が定年退職される際に発足した「湘南の会」だった。2013年の3月下旬、栗田博之先生、前田和泉先生、蒲生先生に私という顔ぶれで、阿保先生のご退職を祝って食事会を開催したのだ。その後、この「湘南の会」は、相馬保夫先生ご退職時の2018年、栗田先生ご退職時の2020年にも開催され、賑やかに美味しく、和やかな時間を共に過ごした。18年の会開催にあたっては、前年の6月頃だったのだろうか、大学前で信号待ちしていた時に蒲生先生に呼び止められ、「来年3月の湘南の会は必ずやってね!」と幹事役を念押しされた。だが、その蒲生先生ご本人は、18年にはご一緒したものの、20年の会には「僕は外食できないので」とのみ仰り、不参加だった。思えば、あの頃には既に病魔が先生のお身体を蝕んでいたのだろう。今回はご一緒できるだろう程度に軽く考えていた私の期待は、ものごみに裏切られてしまった。21年春先に届いた先生の訃報はあまりに突然すぎて、私は言葉を失った。

今でも大きな体躯を揺すりながらキャンパスを歩く先生に、そして深々とお辞儀をなさる先生に、ふとお目にかかれそうな気がしてならない。多磨駅からキャンパスに向かう道すがら、



蒲生慶一先生を偲んで

「准教授のうちに本部棟の5階に行くとは思わなかったなあ」とか、「何かビッグデータを使って一緒にお仕事できないかなあ」などと仰っていた蒲生先生のお声が、この耳の奥に焼きついている。寂寥などという言葉では到底表せない心持ちがいまだにしている。

一同僚そして湘南の同窓生として、心より蒲生先生のご冥福をお祈り申し上げます。